

東海道五十三次

原は東海道第十三宿
果てしない一本道のたどたどかの病場・原
駿鷹山のふもとに広がる浮島を原の牧歌的
な風景。

駿鷹山は沼津
から原にかけての
北方に横たわる
不んぐりした山で
ある。沼津から原
の序へ進むにこれ
が駿鷹山の左に
富士山が姿を現
し、先に進むほど
二つの山の重なり
が離れて富士山
の裾のほうまで
見えてくる。



東海道
五十三次
之内
原

白隠のす
り針松
岡出藩主
池田藤次が
立ち寄った
際、龍刑
鹿のすり針
を贈った
台風に折れ
た傷に用
意に針を
かざり、
すり針以
ての大木に
なす頂上に
刺さる。

吾師代の
名僧白隠
禅師は原
宿の生まれ
諸国修行
の末故郷
に帰る
松陰寺の
住職となす
東海道の
名刹として
参勤交代の
大名もしば
しば訪れた



駿河に過ぎたるもの二あり
富士と白隠

松陰寺正門